

## 創造性豊かに自己の価値を見いだす子どもの育成

— かかわり合いの中で自己を見つめる活動を通して —

横浜国立大学教育学部小学校教員養成課程(美術) H14年3月卒  
川崎市立新城小学校 教諭 鈴木 貴久

### 1. はじめに

図画工作の授業の様子を思い浮かべると、楽しそうに活動をする子どもの姿が浮かんでくるのではないだろうか。時には、どのように表そうかと悩んだりもしながら、子どもは自分なりの表現をしていく。活動後に子どもが自分の作品を見つめて満足した表情を浮かべた時には、見ているこちらまで嬉しくなってしまう。

図画工作科の表現活動では、目に見えないものも子どもの心の中で作りだしており、図画工作科での学びは作品をつくることだけではない。子どもは表したい思いをもち、それをどのように形や色で表現しようかと思考・判断し表現しながら、その心の中の思いと表現した形を関連付けている。そのような子どもの「表したい」、「やってみよう」という思いを高め、「こうしてみよう」、「こっちの方がいいぞ」というよりよい表現を求めていく学習活動に、図画工作科の学びがあると考えた。

### 2. 研究の内容

#### (1) 研究主題について

必ずしも決まった答えがあるとは限らない図画工作科の学習活動の中では、子どもが材料や用具とかかわり合う中で、形や色に自分なりの根拠をもち、よりよい表現を思考・判断しながら「自分の中にある答え」を求めていくことが大切だと考えた。それは、同じ目標をもった他者とかかわり合いを通して自分の中にある思いを見つめていくことで、より一層充実させることができる。自分の納得のいくまで試行・探求していく中で、創造活動への喜びを味わうと共に、充実感や自己有能感を得られるように、研究主題「創造性豊かに

自己の価値を見いだす子どもの育成」・副題「かかわり合いの中で自己を見つめる活動を通して」と設定した。

#### (2) 「かかわり合いの中で自己を見つめる活動」とは

図画工作科での「かかわり合い」は、子どもが他者と同じ教室で学ぶことや同じ題材に取り組むこと、同じ材料や用具を使用することなど広い意味で捉えることができる。また、授業の中で自然に生まれるかかわり合いや班になって同じ視点で作品について語り合うことも、大切にしたい活動だと考える。しかし、かかわり合うこと自体が目的ではない。本研究では、かかわり合いの中で、自分自身の思いと表現を見つめていくことが大切だと考える。互いの表現や作品について他者と意見を交わすことで自分が形や色に込めた思いを明確にし、次への表現につなげるだろう。このようなかかわり合いを通して、自分なりの表現を試行・探求することが重要だと考えた。

#### (3) 研究の視点

##### ① 目標の共有化

～ やりたいことが見付けられるために ～

子どもが授業の題材、使用する材料や用具を知り、そこから自分の「やりたいこと」を見付けていくための視点である。「やりたい」という思いが強いほど、その思いが表現できたときの充実感は大きくなる。そして、「やりたいこと」を見付けるのは、子ども自身である。

例えば、突然、教師が「○○(材料)で、□□(表現対象)をつくるよ」と示しても、子どもの

気持ちが高まらないことがある。特に導入では、材料や用具、題材名などを示していく順序や示し方を意識していくことが大切だと考える。教師は、子どもが授業での学ぶべきことを理解し、「何を」、「何で」、「どのように」活動していくのかを見付けられるように、材料や用具、題材名などの示し方を工夫していくようにする。

また、目標を共有していくことで、子どものやりたいことと、教師の意図する学びの方向性を一致させていくことが必要である。参考作品や例示を見せすぎてしまったり、子どもはそれを目指してしまう。このように、学びの方向性を一致させる時は、子どもが見付けるやりたいことを狭めてしまわないように留意して取り組むことが大切である。

## ②思考の整理と可視化

～ やりたいことを具体的に思考し、表現していくために ～

子どもは自らが見付けた「やりたいこと」を表現していく過程で、「この色の方がいいかな」、「こうしてみようかな」と多くのことを思ったり、考えたりしていく。その活動中に思考したことを一度可視化することで、自分の思いを整理して具体的に表現につなげていくための視点である。

思考を可視化する具体的な方法としては、言葉として書くことや図やスケッチに表すことが考えられる。また、教師が子どもの発言を板書したり、子どもが表現したことを掲示したりすることなどを通して、子どもの思考を整理していくことも考えられる。

子どもが思考を可視化し、整理することで、「何を」、「何で」、「どのように」を関連付けながら、「この材料で、こんな形をつくってみよう」、「この思いなら、こう表した方がよさそうだ」と自分の表したい思いを具体的に表現していけるようにする。

## ③自己と向き合うための、かかわり合いの充実

～自分の思いに合った表現を試行・探求していくために～

他者と互いの表現したことや作品を見て感じたことを交流することで、自分では気付かなかったことを知ったり、よりよい表現方法を思い付いた

りするための視点である。

この③の視点は、本研究の視点の中心となる。子どもが題材に対して自分の思いを形や色に込めながら表現したのちに、かかわり合うことでより自分の思いを試行・探求する活動が充実すると考える。もちろん、①と②の視点でもかかわり合いが生まれているが、ここでは教師が意図的にかかわり合いの場を設定する。子どもが自分の表現をよりよくするための視点として、他者の意見を捉えること大切である。そうして表現活動と鑑賞活動を一体化させながら自分の思いに合った表現を探求できると考える。

## 4. 研究のまとめ

本研究を通して、子どもが今の自分自身を見つめながら、表したい自分の思いを形や色に込めて活動をおこなう様子を多く見ることができた。その活動の中で子どもはよりよいもの、より自分の思いに合ったものへと価値判断をしていた。子どもの学習活動からは、「自分がなぜそれがよいと思ったのか」、「この思いをこの形で表した」と子どもが思いをもち、考えながら表現していたことが伝わった。そして、作品からは、子どもの思いと表現が結びついていることが感じられた。

また、自分の思いを試行・探求し表現することができたときに子どもは、自分の表現を他者に見てもらいたい思いが高まっていた。それは、「ほら、ここ、すごくよくない？」と自分の表現を伝える姿や自信をもち他者に表現の意図を伝える姿として検証授業で多く見ることができた。そのように、自分の思いが満たされることで、進んで他者にかかわり合うようになっていた。そして、他者がその表現のよさを感じ取ってくれた時に充実感を感じたり、他者の意見から自分の考えを深めていくことで、さらによりよい表現ができた時に自己有能感を感じていたりしていた。

このようなかかわり合いの中で自己を見つめることにより、自己の価値を見いだす子どもの姿を見ることができた。そして、一人一人の子どもが自己の価値を認識することは、これからの未来を豊かに生きていくために必要だということが見えてきた。